

ニューオリンズ センチメンタル・ジャーニー (完)

「ガンボ料理」を存分に堪能してから、繁華街「バーボンストリート」に繰り出した。昔ながらのジャズをゆつくりと楽しみたいと思っただけで、「ブルーズ」が幅を効かしていた。ボリュウムを目一杯に上げ、どうだ！ どうだ！ と言わんばかりの凄まじい音量の「ブルーズ」、正確に言えば「ブルーズ・ジャズ」が街に溢れていた。「センチメンタル・ジャーニー」といった気分は吹っ飛んでしまった。ともかく音の洪水が左右前後から迫ってくるのだから、どこか良い店がないだろうかなどと探し歩いていても落ち着かない。



ところが「ブルーズ」が好きなKは、隣で勝手にウキウキし始めた。歩きながらリズムに合わせて身体を動かしている。雰囲気である。それに比べ、僕はそれほど「ブルーズ」は好きではないときている。やりきれない気分に襲われた。どこでも良いから早く店に飛び込みたいという衝動にかられた。

余談だけれど、一言に「ブルーズ」(blues)——「ブルース」ともいうけれど、これを説明しだすと切りがない。昔、酔っぱらっては僕もよくやったチークダンスの時に流れる定番の「ブルース」と同じ綴りで、同じように発音することも少なくない。だが、それとはまったく違う。ひらたく言えば「四分の四拍子の哀愁を帯びた歌曲。アメリカ黒人に歌われた哀歌。のちジャズに取り入れられてジャズの音楽的基盤ともなった」(大辞林)という流れのヤツだ。広辞苑には「①一九世紀末にアメリカの黒人が生んだ歌曲。ヨーロッパ音楽にない独特の音階・旋法を用い、三行詩型一二小節が基本型。多くは個人の苦悩や絶望感を即興的に歌った。②社交ダンス用に演奏される四分の四拍子の哀調をおびた曲」とある。詳しいことは分から

ないけれど、この②の意味と区別する意味で、敢えて「通」は「ブルーズ・ジャズ」を「ブルーズ」と言うのかもしれない。

ちなみに研究社「新英和大辞典」で「blues」を見ると、第一義は「気のふさぎとか憂鬱症」で、その次に「米国黒人の歌で、blue notes を持つ音楽。ジャズに決定的な影響を与えた」とある。そして「blue note」については「ブルーズ特有の施法で、ハ長調で言えば半音下げられた三度または七度を指す」とある。一方、「大辞林」では「長音階の三度（ミ）と五度（ソ）と七度（シ）の音を半音下げた音。ブルーズ・ジャズに特徴的な音」と説明されている。



この「ブルーノート」(blue note) という名前のジャズのライブハウスが青山にある。今も残っている数少ない老舗の一つで、二年ほど前、元の場所からちよつとしか離れていないところに新装開店した。相当に客席を増やした上に、ビッグバンドの生演奏も楽しめるようにステージも大きくしたという。この新しい店にはまだ行

つてはいないが、なかなか繁盛しているらしい。ジャズ愛好者が若い人たちの間で静かに増えてきているらしい。

「ジャズ保存小屋」

もつとも僕にとつては、こうした話なんかどうでも良い。話をするよりも浸っている方が良い。「ブルーズ」もジャズである。若い頃からジャズなどは好きで、「ブルーノート」にも出入りしたけれど、それよりも同じ青山にあった、もつとこぢんまりとした店の方が好きだった。いつの間にか、その常連になっていた。でも、蘊蓄を披露し合うような「群」にはどうしても入れなかった。それよりも隅っこの定席

で、バーボンのオンザロックを片手に、音階と音色とリズムが創り出す、いま風
言えば、「バーチャル」な世界に一人で漂っているのが好きだった。

だからニューオリンズの「バーボンストリート」の雑踏の中で、大音量のブル
ズに浮かれるよりも、一刻も早く、どこか店に飛び込みたかった。

「おい、ともかく適当な店に入ろう！ 駄目なら別を探せば良い！」

黙っていたら、いつまでもウロウロしていそうなKを促し^{うなが}、メインストリートか
らやや奥まったところのステージで数名が演奏している姿が目飛び込んできた店
に後先を考えずに入った。ともかく少し落ち着きたかった。まだ時間が早いせいか、
観客は数名だった。一ドルか二ドルで飲み物を注文するだけで済む。適当な場所に
陣取って、若い黒人の「アンチャン」たちが頑張っているのを聞くことにした。

最初は、ホッとしたことあつて、「結構、行けるじゃん！」などと楽しんでい
た。だが、数曲を聞いて、異口同音に「おい、出よう！」と言いだした。彼らは観
客が増えてきたらノリ始めたようだけれど、それが僕たちには逆効果だった。だん
だん聞き苦しくなってきた。

「駄目だな！ こうなったらオーソドックスで行こう！」

どちらともなく言いだし、再び「バーボンストリート」に出て、それらしき店を
探し始めた。しばらく冷やかしながら歩いていたら、突然、騒音の中から、郷愁を
覚えるような音色が聞こえてきた。交差点の角にある古めかしいライブハウスだっ
た。覗くと、いい年をしたというより、ほとんどが老人のグループだった。それも
全員が白人という珍しい組み合わせである。

「これは面白そうだぞ！」

明らかに、それまで眺めてきたグループとは異質な感じがした。それでついつい
引き込まれてしまった。観客はまばらで、僕たちは前列の特等席に陣取った。改め

て店の謳い文句を見ると「ジャズ保存に専心のバーボン小屋」とある。まさに頑固者の集団のようなグループである。

「おい、これは伝統芸能保存ハウスだぞ！」

「もしかすると大当たりかもしれない」

「あのドラマー、倒れちゃうんじゃないか」

こんな軽口を叩きながらも、嬉しさがこみ上げてきた。というのも、まさに若い頃に親しんだ懐かしいスタイルのジャズだったし、それにどの奏者も良い味を出していた。ヨボヨボなのに張り切っているボスのドラマーは憎めないし、それと小太りのニコニコしているバンジョー奏者との対比の妙が楽しい。

席に着くや否や「飲み物は？」と聞きに来た。で、「バーボンはある？」

と言ったら——というのも、その時はまだ「バーボン小屋」という名前に気が付いていなかったからなのだけれど——「もちろん、当たり前じゃないか」とぶつきらぼうに切り返された。相手にすれば、当然の反応なのだろうけれど、こちらも「この野郎！」と言いたくなかった。

しかし、そんなことも直ぐに忘れ、運ばれてきたバーボンのオンザロックを口にしながら、いつになくスイングしていた。曲が終わるたびに、二人とも夢中になって拍手し、声援を送っていた。気が付くと、「小屋」はほぼ満席になっていた。それも老年の白人たちがほとんどだ。誰もが僕たちと同じように喜んでいて。年甲斐もない客たちの熱狂振りに「オジン・グループ」もまた年甲斐もなくノッてきた。

そんな時だった。通りの反対側にある「ブルーズ」のライブハウスの音量が一段と上がった。それを合図に通りを挟はさんで「伝統芸能バンド」と「流行バンド」の競演が始まった。

ボスのドラマーが露骨に眉をひそめた。そして全員に合図を送ると同時に、負けてなるものかと懸命にドラムを叩きだした。ベースもクラリネットもサククスも、そしてバンジョーも、「流行バンド」を意識して、本格的な掛け合いを演じ始めた。面白いことこの上ない。大きな拍手がわき起こった。頑張れ！ 頑張れ！ やれ！ やれ！ そんなノリである。

「向かいの店で演奏しているのは、あのドラマーの息子じゃないか」

「うん、きつとそうに違いない」

「息子に負けるものかと頑張っている雰囲気だ」

「でも、あと二十年もすれば、今度は息子がここでやっているかもしれない」

「絶対に間違いない」

そんなことを叫びながら、ノリにノった。「小屋」全体が、それも老人たちが一様に異様に盛り上がった。行け！ 行け！ という掛け声あおに煽られて、必死で演奏を続けた。明らかに時間はオーバーしていた。最後の一曲が終わった時には、万雷の拍手だった。

そしてドラマーのボスが立ち上がった。エネルギーを使い果たしたようで、思わず舞台から降りるときによろけた。恥ずかしそうに苦笑いをした。それを見て全員が今度は本当に有り難うという大きな拍手を改めてした。本当に気持ちの良い一晩だった。